

パンタナル通信

南北米福地開発協会 会報 2005年8月1日発行 第23号



パラグアイ訪問記

(二〇〇五年六月一八日—二九日) (文・飯野貞夫)

六月一八日にNYを発つて、アスンシオンに向かった。日本は夏に入ったが、パラグアイは短い秋の季節で、涼しいしのぎ易い気候であった。空港から市街地に向かう街並みの石垣の上にも時折、枝を伸ばした早咲きのラバッチョがピンク色に咲いていた。レダの方面が小雨で、滑走路に降りれないという情報で、急遽、日本人移住地ラパス市を訪ねることにした。アスンシオンから車で国道一号線を四〇〇km程南東のアルゼンチンとの国境の街、エンカルナシオン方面に向かつた。ラパス市はエンカルから北に四〇kmほど手前にある。その途中に世界遺産となつたトリニダード遺跡がある。映画の「ミッション」の舞台となつた所で、一七世紀初め、ザビエルと同じ旧教のフランシスコ派の宣教師が、現地人インディヘナと共に理想郷建設に燃えて七〇年間栄えたが、スペイン本国によつて攻められ、遂に潰されてしまつたといつ。観光施設は小さな商店があるだけ。全くの廃墟の残骸で、当時の面影をかろうじてとどめているが、案内書も説明の掲示板も何もない。近くの大学院生さんが、遺跡入り口でお客を待つていてわざわざ手当てで案内してくれた。理想を求めたという意味においては我々の先達でもあるため、ある種の共感するものを感じた。話が前後してしまつたが、ラパス市では、田岡大使の実家の大きな門を潜つて進むと、土壙に囲まれて中門があり、そこに息子さんが待つて、笑顔で出迎えてくれた。昔の庄屋か陣屋のような家に案内してくれて、昼食まで準備して歓迎してくださつた。「親父から大切にと言われているものですから。」と言いながら、ご夫人やお子さん達を紹介してくれた。昔の庄屋か陣屋のような家に案内してくれて、昼食まで準備して歓迎してくださつた。田岡大使はじめ数少ない日本人が半世紀を懸けて苦労し開拓して築き上げた街で、途中で亡くなつた方も、脱落して行つた人たちもいます。森林原野を開拓して見事な農場が一面に広がつていました。四月から九月に小麦、九月から三月まで大豆を作つている方が多いそうです。途中で亡くなつた方の苦労の上にこの街や畑があると思うと感無量でした。森林未だレダの天候が芳しくないということで、吉村、三石、私の三人でシユウダエルエステに飛びました。初めて降りたパラグアイ側のイグア空港には、ベニグノさんが出迎えてくれて、タクシーで案内してくれました。空港から二〇km程のところにあるイグアス日本人移住地は千人近くの人が住むパラグアイ最大の日本人町です。

さすがに中央農協、レストランや
スーパー、マーケット、公民館、学校、
病院など、日本人が住み易い環境が
整えられていました。街の中央には
快晴の青空に赤い鳥居がくつきりと
聳えた公園がありました。園内には
昭和五十三（一九七八）年、当時の
皇太子ご夫妻（現天皇陛下ご夫妻）
が植樹をされたケブランチヨの木が
二〇mを越えるほどの大木に育つて
いました。郊外を走ると広々と広が
る丘陵の畑には大豆、トウモロコシ、
小麦、米、菜の花畑（菜種油）など
が作られています。薬草になる植樹
園も一部見られましたが、牧畜は余
り大掛かりにやっているところは少
ないそうです。



飯野氏、田岡氏、佐野氏（大使の自宅前）

日稼動して、今日ではパラグアイの貴重な外貨収入源になっています。というのは、パラグアイの電力使用量は、タービン一基の約半分でまかなるので、他はブラジルに売っているのです。という事は、ブラジルの電気使用量が、そのままパラグアイとの産業の規模の違いに見えます。

近くに動物園が出来たというので寄つてみました。昨年八月に開館したとの事ですから、全てが新しく出来ていました。小さいながらも博物館も併設していて、インディヘナの歴史的土器や生活用具などもきれいに展示されていました。パラグアイの貴重な動物達も照明つきのガラスケースの中に剥製で展示され、説明がされていました。時間が無いので素通りして行こうとしたら、数少ない客に見てもらえなくては大変とばかりに、数名の女性職員が熱心に鑑賞を薦められ、結果足早ながら見ることになりましたが、今後の観光ツアーや青年ボランティア隊のことなど考えて、参考になりました。動物園の動物もできる限り自然に近い形で飼われていて、都会の狭い檻の中に入れられるいる動物から比べれば、幸せそうでした。ここも身近にパンタナールの動物を確認でき、良かつたと思います。全て無料というのが、やつと観光に力を入れるパラグアイの政府の姿勢を見る思いでした。



「レストラン白澤」で、バイキングスタイルのパラグアイ料理（1人三ドル！）を頂いた後は、イタイプー（ガラニー語で歌う石）ダムに回りました。ブラジル側からの案内は今までありましたが、昨年からパラグアイ側からも無料でバスが出て、女性ガイドがダムの案内をしてくれるようになりました。お客が殆ど居ないということもあつてとても丁寧に案内してきました。お陰で時間を取り過ぎてしまつたほどでした。世界一の発電量を誇る二ダムの施設を案内してくれました。お陰で時間を取り過ぎてしまつたほどでした。○基（内十基がパラグアイ用、後はブラジル用）からの発電タービン（ドイツ・シーメンス社製）は、パラナ川からの豊かな水量を使って毎日稼動して、今日ではパラグアイの電力使用量が、そのままパラジルの電気使用量が、そのままパラジルになります。





シユーダデルステ（東の街）は、パラグアイ第二の都市といわれ、ビルも沢山並んでいますが、何といつてもここは、自由市場になつていて、メルコスルの商品はじめ様々の工業製品も、農産物も、日用品も売られていて、安い為、香港に次ぐ賑わいとなつて、担ぎやさんが仕入れに沢山来るそうです。商いは朝4時くらいから始まり、夕方5時で終わります。日が沈む前の5時頃着いたのですが、店はどんどんシャツターを下ろしたり、片付けたりして、道路は至るところゴミの山が築かれています。この時間帯、この様は香港と似ているようで似ていよい街です。早朝までにはゴミ回収車がきれいにしてしまうそうです。そのゴミだけでも、すさまじいエネルギーの一端を垣間見るようにでした。

夜は九時頃から、食事と踊りのショウがあるというブラジル側のレストランに行きました。ビザがなくても行けるのがみそです。毎晩3百席以上の椅子が満席だというのですから、観光で知られた人気のスポットという感じです。食事はバイキング、ショウは南米のダンスを中心、様々曲芸まがいのステージが繰り広げられ、客席の熱気を高ラジル物価では、ちょっと高いかなと思いつます、南米の夜のひと時を楽しむ貴重な場所です。余りに遅くなり、吉村さんも風邪気味で食事が出来ず過労気味のため、夜行バスで帰るのをやめて、三人部屋で三〇ドルという木賃宿に宿泊して、朝アスンションに戻りました。（飛行機は一人七〇ドル）



日本人スタッフと現地労働者

マジ村学校建設支援金のお願い

青年奉仕隊が8月25日に出発します。建設資金が十分に集まっています。よろしくお願ひします。

送り先：郵便口座
南北米福地開発協会事務局 代表
柴沼邦彦 10180
- 77680471
建設資金と付記して下さい

電話 〇四四八一九一八九一八〇
FAX〇四四八一九一八二一八二〇
〒二二二三〇〇〇一
神奈川県川崎市高津区
溝口三一十一十五

南北米福地開発協会事務局

沢山載せてのフライトです。次第に上昇し、雲を突き破つて白雲の海原の上に出ると、陽が輝き四方八方真っ青で吸いこまれるような青空でした。飛行時間二時間二〇分で遂にレダに到着しました。中田先生を中心に、懐かしいご苦労されたの方々が、等しく笑顔で出迎えてくれました。私にとつて昨年の12月以来のレダ訪問です。常駐している警察官や海軍の方達も「ココ」と歓迎の手を差し伸べてきました。レダは今にも降りそうで降らない曇りの一日だつたそうで、よくも堪えて降らないでくれましたと思わず天に感謝しました。早速、会長がされたように中田さんが車を運転して、吾等到着の三人を連れて、園内を見て回りました。新農場地や、養殖場も植樹園に沿つて作られていました。馬の厩舎、牧童の住居、農場研究所など、次々に未来に向けての基盤が準備されました。奥地に向かつての道路脇も椰子の木が伐採され、藪が取り払われて整地がされて両脇200m位の幅でズーと、牧場用に奥地まで準備が進められていきました。

今は毎日牛の数が確認されて、きちつと管理されているそうです。会長の基準をしつかり相続された中田先生を中心に、数少ないメンバーでよくここまで着実に進めてきたものだと深い感銘を覚えました。まだ明け染めぬ夜空にたつた一つの星、何処かで鳴きつづける、虫の音、早くもさえずる小鳥たち、レダは皆早起きです。6時からの朝食後、今日の打ち合わせがされて、6時30分、労働者の点呼と指示がなされ、大空一面まだらで灰色の曇り空の下、一斉に一日の出発がなされました。（二十四号に続く）



魚の養殖場